

奨励金No.1562

現代社会における「寄付」行為の意味再考 一個人の語りに着目した社会学的研究

岡田 彩

東北大学大学院情報科学研究科 人間社会情報科学専攻 社会構造変動論分野 教授（採択時は准教授）

Revisiting the Meaning of “Giving” in the Contemporary Society: Sociological Approach with Focus on Individual Narratives

Aya Okada,

Tohoku University, Graduate School of Information Sciences, Human-Social Information Sciences, Social Structure and Change, Professor (Associate Professor at the time of the award)



人はなぜ寄付をするのか。この古くて新しい問いを、「動機の語彙論」という社会学理論の見地から検討した。この理論によると、動機とは、心の中に予め存在するものではなく、自らの行動を他者に説明する際に言語化される言葉である。それゆえ、相手が納得・理解しやすいと考えられる内容が言語化される傾向が強いという。この理論に基づく寄付者のインタビュー分析から、「言語化されやすい（likely-to-be-said）動機」と「言語化されにくい動機（I'd-rather-not-say）動機」があること、またその境界線への着目から導かれる新たな研究の問いを提示した。

Why do people give? This project approached this old yet new question with the sociological theory of “Vocabularies of Motive.” The theory argues that motivations of human behaviors do not pre-exist in one's mind. Rather, motivations are words verbalized to describe one's behaviors to others. Because human beings prefer to verbalize what “makes sense” to others in a given context, some motivations are given repeatedly, while others are not. Revealed through analysis of interviews with this theory were boundaries donors draw between “likely-to-be-said” motivations and “I'd-rather-not-say” motivations. The project identified and discussed new research questions that emerge with a focus on these boundaries.

1. 研究内容

現代社会において、寄付は、どのような意味を持つ行為として理解され、実践されているのか。本研究は、金銭や物資の寄付など、他者や社会に寄与する帰結を伴う行動を取る個人を取り上げ、その経験の語りから、寄付行為の意味を再考するものである。

寄付は、私的な（private）資源を個人や組織が投じる行為でありながら、その帰結として社会的な課題の解決など、公的な（public）目的達成に関わるという特徴を持つ。経済的合理性という観

点からは、必ずしも説明がつかない人間の行動であり、「人はなぜ寄付をするのか」という問いを、様々な学問分野の研究者が問い続けてきた。その豊かな蓄積の中で、利他主義（altruism）、評判（reputation）、自尊心（self-esteem）、暖かな光（warm glow）、罪悪感（guilt）といった動機が特定され、多様な文脈や実験的環境において、その作用が検証・実証されてきている。

こうした従来の寄付研究に対し、本研究では、2つの問題提起を行った。第一に、従来のアプローチは、寄付の動機を単純化しすぎている可能

性があるのではないか。寄付の動機は複雑であり（Breeze, 2021）、定量的アプローチが検討してきたように、一つの動機、あるいは複数の動機の組み合わせで説明できるものではない可能性がある。第二に、従来のアプローチでは、寄付という行為に、現代社会に生きる人々が見出し得る豊かな意味合いを拾い切れていない可能性があるのではないか。他者や社会に役立つという側面、あるいは、課題解決に寄与するという道具的な（instrumental）側面に焦点が当たりがちであるが、寄付には、寄付者が大切にしている考えや価値観を行動で示すという表出的な（expressive）側面もあると言われている（Frumkin, 2006）。これまでの寄付研究では、寄付という行為が持ち得る多様な意味が見過ごされている可能性がある。

こうした寄付研究の行き詰まりを打破する手がかりとして、本研究では「動機の語彙論」という1940年に提唱された社会学の理論に着目した。この理論は、人間の行為の動機は心の中にあらかじめ存在するものではない、と提起する。動機とは、自分の行動を他者に説明するために言語化された言葉であり、それゆえに相手にとって納得のいく（make senseする）内容が言語化される傾向が強いという。一定の状況下において、何が行動の動機として「適切」であると考えられているかによって、言語化される動機が制約されている可能性を提起している。これまで、犯罪社会学などで多く援用されてきた理論であるが、本研究では、この「動機の語彙論」を寄付研究に持ち込むことを試みた。

理論の検討および寄付経験者へのインタビューの実施・分析から、大きく2つの知見を得た。第一に、「動機の語彙論」を寄付行為の理解に援用することにより、寄付者が自らの行動を説明する際の「言葉」が分析対象として浮上した。定量的アプローチが主流となってきた寄付研究において、質的アプローチの意義と可能性を示すことができた。第二に、寄付者の語りに見られる動機が、2

つに区別されることを明らかにした。ためらいなくスラスラ出てくる動機がある一方、「ぶっちゃけ」「恥ずかしい話なんだけど」「こんなこと言っていていいか分からないのだけど」「本当はこんなこというべきじゃないと思うんだけど」など、ためらいとともに語られる動機があることが浮かび上がった。本研究では、前者を「言語化されやすい（likely-to-be-said）動機」、後者を「言語化されにくい動機（I'd-rather-not-say）動機」と名付けた。その境界線は、寄付者自身が引いており、その場にいる他者が「納得しやすい」「理解しやすい」と考えられる動機はよどみなく語られるものの、相手に「おかしい」あるいは「適切ではない」と思われるかもしれないと考えられる動機は、ためらいを示す言葉とともに語られたのである。

以上の知見は、寄付研究に新たな探求の問いをもたらす。第一に、寄付者は、なぜ、どのようにして、「言語化されやすい（likely-to-be-said）動機」と「言語化されにくい動機（I'd-rather-not-say）動機」との間に境界線を引いているのか。その境界線は、どのように獲得され、判断されているのか。第二に、寄付者は、状況や社会的環境に応じて、どのようにこの境界線を行き来しているのか。何がポイントとなって、ためらいを伴う動機は言葉にされるのだろうか。第三に、「言語化されやすい（likely-to-be-said）動機」と「言語化されにくい動機（I'd-rather-not-say）動機」の境界線は、国や社会によってどのように異なるのだろうか。言語化される動機が、状況や環境の影響を大きく受けるという「動機の語彙論」の見地に立つと、寄付者が引く境界線には、国や社会によって差異がある可能性が浮かび上がる。質的アプローチに基づく国際比較研究は、寄付研究において長年切望され、その具体的な方法が模索されてきた（Wiepking, 2021）。本研究から得られた知見は、その可能性の扉を大きく開くものである。

《文献》

Breeze, B. (2021). *In Defence of Philanthropy*. New Castle: Agenda Publishing.

Frumkin, P. (2006). *Strategic Giving: The Art and Science of Philanthropy*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.

Wiepking, P. (2021). The Global Study of Philanthropy Behavior. *Voluntas*, 32(2): 194-203.

2. 発表（研究成果の発表）

1. Okada, A. (2023). Constrained Motivations? Revisiting Giving Behaviors with the Theory of “Vocabularies of Motive.” The 52nd Annual ARNOVA (Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action) Conference, November 16-18, 2023, Orlando, Florida.
2. 岡田 彩 (2024) 「寄付の『動機』を再考する—『動機の語彙論』を手がかりに」日本NPO学会第26回研究大会（2024年6月15日～16日、高崎経済大学）.